

リスクアセスメントは “危険源に注目”



公益財団法人国際人材育成機構
社会保険労務士
原田 芳幸

リスクアセスメントは、事業場のリスクを事前に評価し、対策をたて、実施することにより、労働災害を未然に防止するものです。

特に、リスクアセスメントは、重篤な災害に的を絞って行うことが肝要であると言われており、**重篤な災害を防止するためには、何よりも“危険源を見抜くこと”がとても重要**になります。



それでは、危険源とは、何でしょうか。

危険源は、労働者に負傷または疾病を生じさせる潜在的な根源であり、「ハザード」と呼ばれ、労働安全衛生法では、「危険性または有害性」と表現されています。

労働現場においては、具体的に以下の危険源があり、私たちはこの危険源の中で働いていることになります。

リスクアセスメントを効果的なものにするためには、この危険源をいかに見抜くかがカギとなります。

危険源

- ① 機械的危険源(可稼働装置、フォークリフト)
- ② 電氣的危険源(感電)
- ③ 熱的危険源(火傷、火災、爆発)
- ④ 生物学的危険源(カビ、ウイルス)
- ⑤ 化学物質的危険源(発がん性物質、有機溶剤)
- ⑥ 高所(墜落・転落、転倒)

2 危険源を見抜く ⇒ “エネルギーに注目する”

それでは、危険源を見抜くには、どうすればよいでしょうか。

ここで重要なことは、**危険源は何らかの“エネルギーを持っている”**ということです。

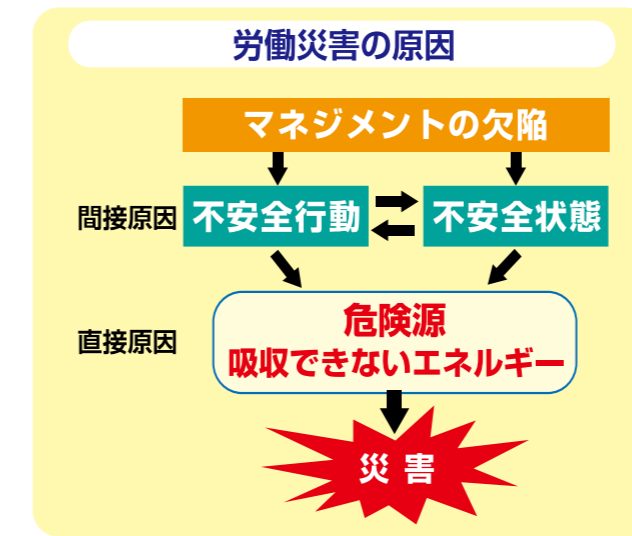
危険源 || エネルギーを持つもの

私たちは、普段、機械や電気や化学のエネルギーをうまく利用して仕事をしています。

ところが、エネルギーが突然人に襲いかかることがあります、それが労働災害ということになります。

どうしてエネルギーが人に襲いかかってくるの

か。それは、マネジメントの欠陥により、労働災害のきっかけとなる「不安全行動」や「不安全状態」が原因となり、吸収できないエネルギーが発生し、それが危険源のエネルギーとなって人に危害を加えて災害となります。



そこで、危険源を見抜くためには、この**エネルギーに注目**する必要があります。

労働災害の中でとても多い災害として、“機械による挟まれ”の事故がありますが、これは、機械のエネルギーと運動のエネルギーから生まれる災害であり、機械が回転し、駆動することによって作業員が機械に挟まれたりします。

したがって、危険源を見抜くには、そのような“**エネルギーに注目し、そのエネルギーが自分の仕事の中において、どこにあるのかを見極める**”ことがとても重要です。

例えば、“電気エネルギー”について考えてみると、職場であれば200Vとか400Vの電圧を利用しています。そこに電気エネルギーが存在していることを認識することが大事であり、その上で絶縁のカバーが付いているか等のリスク管理を行うことが重要となります。

3 労働災害の被害の大きさは“危険源のエネルギーの大きさ”に依存

次に労働災害の被害の大きさは、基本的には**危険源のエネルギーの大きさに依存**します。

“高所”という危険源の場合に、高所から落ちてどんな怪我をするのかは、高さのエネルギーに依

存します。50cmから落ちて災害にならないかもしれませんが、2mから落ちたら死に至ることがあります。

私たちの働く現場において、そこに存在する危険源となる**エネルギーの大きさに着目し、重大な危険源を見抜く**ということが重要となります。

重大な危険源とは大きなエネルギーを有している、①大きいモーター、②駆動する機器、③高所からの墜落、④高い温度・圧力・電圧、⑤重量物などがありますが、これらの重大な危険源を絶対に見落とさないことが重要なポイントです。



4 “危険源を主人公としてリスクアセスメントを行う”ことが肝要

最後に、リスクアセスメントは、危険源を主人公として危険源が影響を及ぼす範囲を整理し、危険源と人との接点を洗い出すことが重要です。この職場で、“もし人が亡くなるとしたらどこなのか”、“**重篤な災害が起きるとしたらどこなのか**”そして“**その危険源は何なのか**”、という目で見ることが重要です。

重篤な災害を防ぐところに力点を置いて、重大な危険源を見抜くことが重要となります。

身の回りの危険源に着目したリスクアセスメントを実施し、“**重篤な災害を絶対に起こさない**”との決意で、安心・安全な職場の構築をして参りましょう。

参考 ▶ YouTubeチャンネル「安全衛生アカデミー」
労働安全コンサルタント・労働衛生コンサルタント
黒崎由行氏制作の「リスクアセスメント」関連動画